
巨怪

佐竹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巨怪

【Nコード】

N3957D

【作者名】

佐竹

【あらすじ】

真つ昼間に工事現場に出現した謎の黒い塔。しかし目撃者が一人もおらず、工事現場の人間や器具一切は消えていた。現場の隣人は言う「塔に食われたのだ」と。塔を調べようとしていた主人公らは住んでいるアパートの爆破とともに「調べるな」と警告を受ける。協力者をえ、山奥に逃げる主人公ら。その先にはもう一つの黒い塔が。不用意に近づいた主人公と隣人は塔に食われた……

元

まさに樹海という言葉が相応しい深く黒い森。そこは世界の全てが森であると錯覚させる程に広大だった。巨大な波のような山々は果てなく続き、その山肌にはさざ波のように巨木が大きな葉を揺らしている。そこは人間という存在をまったく否定した土地。人間など生まれる遙か昔。三界の全てを竜が支配した時代。

鼻をヒクつかせて地表をはい回り、餌の小さな虫などを探すことに一生のほとんどを費やす彼にとっては、自分の住む渺茫たる世界のことなどまったく関心になかった。葉から滴る雫で充分のどの渴きを癒すことの出来る程小さな彼にとって、認識出来る最大の大きさは巨木に影を落とす大きな生き物だ。

怖い物知らずだった若い頃、巨木の上端から見たそれは、目玉だけで彼よりも重そうな首の長い竜だ。彼はその時始めて本当の恐怖を知った。成長して、補食者に対する恐怖というのも学んだが、ただだけで恐怖を感じたのはそれが最初で最後だ。それ以来、巨木の上端までは登っていない。地面には敵もいるが、あの竜を見ずにすむ。見えたとしても、脚の一部だけだ。巨大さはそれだけで彼の心を蝕んだ。それ故彼はその一生を薄暗く視界の悪い森の底で暮らすはめになったのだ。

急に夜がやって来て、彼は落ち着かなくなった。さっきまで木漏れ日が森の底に届くほどの快晴だったはずだ。それが急に、曇りよりも深い影が彼の上に覆った。補食者の影かそれとも竜の影かと、彼は辺りをうかがった。補食者も竜も近くにいない。それどころか自分以外の動物の気配を感じない。全身の毛を逆立てて必死に影の主を探した。

上空には巨木の黒い葉しか見えず、その先には深い影があるだけ

だ。

巨大な影が動いた気がした。何故そう感じたのかわからない。空気の動きとも振動ともとれない妙な感覚を全身で感じた。確かに動いた。上空の葉が全て、そろって同じように揺れている。自然の風では有り得ない動きだ。

だが彼は、そんなふうに理性で理解した訳ではない。本能と過去の恐怖から感じ取ったのだ。

影の主の大きさは竜の比ではない。大地の昼を夜に変えてしまうほどの大きさだ。

彼は毛を逆立たせ、身体を硬直させて影をじっと見ていた。ただひたすら、影がどこかへ行くのを待つしか出来なかった。

一の 壁

連続的細かい揺れが狭い部屋を激しく揺さぶる。部屋中のガラクタがつられて振動し、工事の音と重なって大騒音となる。

そんな揺れと音の中、その人物は熟睡していた。布団を頭まで被り、体を小さく丸めている寝姿は、周りのゴミやガラクタと区別がつかない。

部屋の至る所でうずたかく積み上げられた本やガラクタの山が揺れている。不思議なことにそれらは揺れるだけでいつこうに崩れる心配がなかった。いや、よく見ればそれは当然だ。崩れる余地のあるものは全て崩れ、床は足の踏み場もない。崩れた物が今ある山を支えているのだ。

外で一段と大きな音がし、部屋が大きく縦に揺れた。

「ぐふう」

押し潰されて息がもれ出したような、声とも悲鳴ともつかない音を出してその人物は目を覚ました。

50cmはある大きな怪獣の人形が腹の上に落ちたのだ。なぜかそこだけは綺麗に整頓された本棚には、さなざまな怪獣の人形やいろいろなジャンルの分厚い本がきちんと並びられている。整頓されているだけに、逆に崩れる余地があったのだ。

「いつてえ……」

腹の上の人形を持ち上げながら体を起こした男は、少年とも言えるような小柄な青年だった。顔と声を確認しなければ、中学生にも間違われそうだ。

寝ぼけ眼を擦り、少し安心したように人形を眺めた。ゆっくりと立ち上がると、大きな人形を本棚の一番上、恐竜の塩ビ模型と金属製の骨格模型の間のスペースに置いた。満足げに本棚の模型や人形、何かの専門書を眺める。

落ち着くと、青年はあることに気がついた。

「なんで落ちてきたんだ？」

荒れ果ててはいるが、静かな部屋はすでに微動もしておらず、さつきまでの騒がしさが嘘のようだ。

青年は取りあえず、爪先立ちで小さな台所に移動し、昨日からの洗い物を横にずらして顔を洗った。壁にかけてある小さな鏡には激しい寝癖頭で、うつすらと髭を生やした男がいる。青年はその髭を気に入っていた。大きな二重瞼の目が特徴的で二回りは童顔だ。その小さな体格とあいまって、髭が生えるまで正しい年令に見られたことがない。

剃ろうかどうか迷って、結局剃らずに身支度を始める。ゴミとガラクタだらけに見える床のあちこちから、鞆やら財布やらを引っ張り出して、部屋に一つの扉の前にかけてある洗濯物から適当に選んで着ていく。準備が済むと、寝癖頭をキャップで隠して扉を開いた。洗濯物をかき分けて頭を出すと、青年は硬直した。

「……」

口を半開きにし、ドアノブは掴んだまま、靴も履きかけのまま時間が停まってしまった。

青年の住む部屋はボロアパートの二階。窓側は小路、玄関側は一日頃ぐらいから何かの工事で地面を掘っている駐車場のはずだ。

本来駐車場があるべきそこには、壁があった。真っ黒で垂直の壁がアパートの軒を越えて伸び、どのくらいの高さなのかわからない。幅は正確に駐車場の幅だ。奥行きもどうやら駐車場の分と同じようだ。駐車場は確か、ほぼ正確に正方形だった。ということは、その黒い物体は壁ではなく、四角柱のようだ。

何とは無しに、微動だにせず、青年はそんなことを考えた。それも終わると、やっと一般的な反応をすることができた。半開きの口が動く。

「なんだこれ」

一の二 箱

青年が落ち着いて左右を見ると、左隣りの部屋の住人も手摺りから体をはみ出さんばかりにそれを凝視している。なにやら話し声も聞こえ、手摺りまで近づいて下を見れば、大家の奥さんと一階の住人が不機嫌そうに小さな声でそれに対して愚痴のようなものをこぼしている。通りの方からも話し声が聞こえ、どうやらやじ馬が集まっているようだ。

「あれって何かな？」

隣人の男がこちらをまったく見ずに言った。

青年はいきなりの質問に驚いて隣人を見た。

それまでろくに話したこともなく、自分よりも年上であるとしたか知らない隣人に対して、当たり前障りのない返事をする。

「黒い……壁……いや、建物じゃないですか」

「箱にも見えるな。魑魅魍魎でも入ってるのかな？」

初めてまともに会話をしたが、まともな会話をした気がしない。

「たった一晩でどうやって造ったんでしょう？ やっぱり箱で、ただの張りぼてなんですかね？」

「まさかさっきの揺れを気がつかなかったのか？ 大石君。あれは一瞬で出来たんだよ」

それまで瞬きもせずに黒い物体を見ていた男が、いきなりこつちを見て言った。おまけに名前を知らない相手に自分の名前を呼ばれ、思わず身構えてしまったのでその言葉の意味をまったく理解できなかった。

隣人は再び正面に顔を戻して言った。

「俺もその瞬間を見たわけじゃないが、工事の音と話し声が一瞬消えたと思ったらあの揺れが来たんだ。急いで出たらあれがあった。状況から見て、あの一瞬でこれが現れたのは間違いないだろう」

大石青年は隣人の言葉のごく一部だけ理解できた。

「工事の人達は何処に行つたんです？」

隣人は驚いたように大石を見る。

「盲点だ。そうだ。どうしたんだろ？」

首と体を左右に大きく動かし、隣人は物体の全体を把握しようとする。

大石は興味なさそうに、道まで出て眺めて来ればいいのに、と冷ややかに見ていた。

隣人は今にも手摺りから落ちそうなほど体を乗り出して、アパートの軒よりもはるかに大きい物体のてっぺんを見ようとした。

「やつぱりあれの中かな……」

不安定な体勢のまま呟く隣人に促されるように、大石も軒の上をのぞいた。

物体は無論壁ではなく、箱でもなかった。真つ黒の壁は大石の予想をはるかに上回るほど上空まで伸びていた。

再度まともな精神状態ではいられなくなった大石は、自然と口を開いた。

「オベリスク」

一の三 噂（前書き）

ご意見、改善点などありましたら、是非一言でもご感想をお願いします。

一の三 噂

都市の社会構造とは完成された一個の巨大な社会ではない。地域、会社、学校などの小さな社会が複雑に絡み合つて、互いに影響しあつて形成している。だが、あくまで個々の社会でしかないそれらは、必要最低限の交流しか持たず、都市とは根本的には小さな社会の集合体なのだ。

大石が大学に着くと、あの物体のことなど直ぐに忘れてしまった。学校とは小さな社会の中でも特に閉鎖的で、自ら隔離を望んでいる。何の変哲もないいつもが過ぎていく。

「大石、三加佐町つてあんたの住んでるまちじゃなかったっけ？」

大石の数少ない友人、というよりも時々会話する程度の知人の宇高ヒロミが箸を置いて聞いてきた。

「そうだけど？」

「なんかニユースで、変な建物が何処からともなく現れたつて言つてたよ」

大石は半分以上残っているラーメンを啜りながら、さっきのことを思い出していた。隣人はあの後も大石が出かけるまで、あの場にいたまま物体を観察し続けていた。あの様子だとまだ観察してるかも知れない。

「ねえ何か知ってる？ それとも見た？」

まだ食事中だというのにヒロミは世話しく責め付けてくる。いきなり大石の目の前の席に座つてあつという間にトンカツ定食をかきこんだのはこれが聞きたかつたかららしい。

昼時もとくに過ぎてはいるが食堂にはまばらに学生がいる。ヒロミはそんなことお構い無しに張りのあるよく通る声を響かせて繰り返し聞いてくる。

「おれのアパートの隣だよ」

遅すぎる朝食を食べ終えて大石は答えた。

「マジで？　ねえねえ、どんななの？　本当に人が食べられたの？」

「人が食べられた？」

「ネットの掲示板で言ってたよ。付近の住人によると、工事の人達がああ黒い塔に食べられたって。あ！　あと誰もそれが出てきた瞬間を見てないって本当？」

大石は疲れたような白けたような顔で言う。

「誰もでてきた瞬間を見てないかどうかなんて、おれがわかるわけないだろう。ていうか工事の人達がなくなったのはあれが現れたときだろう？　見たのか見てないのか矛盾してるじゃん」

「あ……そうか」

ヒロミは関心したように大石を眺め、やっと静かになった。今度は真剣な顔をして何かを考え込み始めた。

大石が最初にヒロミに会った時もこんな感じだった。大学に入って間もない頃、講義前に教室で本を読んでいた時、突然話し掛けられ本や趣味の話をした。ヒロミは同じクラスの人に手当たり次第声をかけていた。大石がその時読んでいたのは古生物の本で、話題はそこから地学サークルがあるという話になった。大石が入ろうかなと言うと、非常に興味を示していたヒロミは今と同じように黙って考え込んだのだ。結局二人とも入ったが、大石は半年も経たずにこの前やめてしまった。ヒロミのほうはまだ所属しているらしい。

「よし！」

ヒロミがいい声をあげた。

「今日あんたんち行かせて」

「は？」

「間近で見たいし、詳しい話も近くの人から聞けるじゃん」

この女の子は何にでも興味があるのだ。そして物おじせず暴走に近いスピードで突き進んで行く。

大石は考えた。そもそも朝からちゃんと大学に来ていた人間が何故こんな時間に昼食をとったのだろうか？

一の三 噂（後書き）

解説 大石達の通う学部では、通常の大教室での講義の他に、クラス単位での外国語やスポーツ、教養の授業があります。

一の四 報（前書き）

なかなか話が進まなくてすみません。結構長編になってしまつかも。話のテンポを上げた方がいい、このままでいい、もっと描写が細かい方がいい、などのアドバイスやご意見もお待ちしています。是非一言でも感想をお願いします。

一の四 報

電車が小高い丘の陰から出ると、大石には見慣れた町が現れた。多少時間の差はあっても、ほぼ同じ景色を同じ条件で毎日眺めている。

しかし今日はいつもと違うことが二つあった。一つは隣にヒロミがいること。大石の住む町を食い入るように見ている。その視線の先は大石のアパートがある場所に向けられている。

もう一つはアパートのある所に高さが50メートルはゆうにあるうかという真つ黒な塔が建っていることだ。

「すつごい！ 50メートルはあるんじゃない？」

ヒロミは顔を窓にくつつくほど近づけて見ている。

「約65メートル」

「計ったの？ どうやって？」

ヒロミは今度は大石の顔をまじまじと見た。

慣れないことに多少もたつきながらも、大石は説明を始めた。

「てつぺんを見上げた角度が45°になる位置を探して、そこから塔までの距離を地図で調べる。塔は垂直だから塔までの距離と塔の高さは同じ。それで出た数字が約65メートル」

ヒロミが目を輝かせて大石を見る。

「すつごい！ 私数学とか超苦手なの。成る程、直角二等辺三角形を作ってかたつぽを計るのか」

その反応に、大石の方も驚いた。文系の学部でもあり、どうせ理系的な話はわからないだろうと思ったのだ。それが、予想に反して理解が早かった。

「お前、本当に数学苦手だったのか？」

「だって中高の数学って紙の上の数字なんだもん。文章問題も、太郎君が時速5キロで歩きましたとか、30分休憩しましたとか、つまらないんだもん」

「まあ、わからなくてもいいか」

そんな話をしているうちに電車は減速を始め、いつもと雰囲気が違う駅に着いた。人々の様子が落ち着きなく、何となく祭や遊園地、都市部の繁華街のそれに近い。

改札を出ると、違いは一目瞭然となった。

「あ！ テレビが来てる！」

駅のロータリーにあるモニュメントの正面でロケをやっている。

「あれキャスターのムツティーじゃない？ って、あの時計塔！」

カメラに向かって話しているのは、最近人気急上昇中の男性ニュースキャスター、愛称ムツティーだ。芸能人やテレビ有名人関係に弱い大石でもその顔とあだ名は知っている。

「えー、ご覧下さい！ この時計塔！ あの黒い塔、オベリスクとそっくりです」

大石もそれを今それを見るまで忘れていた。そうだ。駐車場の塔はこの時計塔にそっくりなんだ。朝も見たはずだが、スケールの差からか、まったく気付かなかった。

「あの塔の名前はオベリスクに決まったのか……」

大石は口の中でつぶやいた。

「えー、おまけにこの時計塔、形状が完璧にあのオベリスクと一緒になんです！ しかも縮尺が綺麗にオベリスクの十分の一なんです！」

二階建ての駅舎と同じくらいの高さの時計塔は、色といい質感といい底面に対する高さといい、まさにあの塔とそっくりだ。

ムツティーは時計塔に更に近づき、根元で屈み込んだ。

「えー、この時計塔、底が正確な正方形で、面積も正確に1平方メートルなんです！ つまり！ オベリスクがすきまなく建っている駐車場、あそこも正確に正方形で、面積はジャスト100平方メートル！ そんな不自然な駐車場があるでしょうか？」

ムツティーと、ついでにヒロミの興奮がどんどん上がって行くのがわかる。ヒロミの目は、瞬きをほとんどしないにも関わらず輝いている。

「不自然な駐車場！ この時計塔！ そしてあのオペリスクの関係とは一体なんなのでしょうか？ そして一番気になるのは、あの塔が誰によって、どうやって、何のために建てられたのか？ 謎の解明はCMの後で！」

一の五 群（前書き）

事件発生までもう少しかかります。ご指摘、ご感想などお待ちしております。

一の五 群

大石とヒロミの予想通り、アパートの近くは多くの野次馬でこつた返していた。そんなに近付かなくてもオベリスクは見えるし、むしろ見やすいのに、近くで見なくなるのは何故だろうか。しかしよく見ると、野次馬の半分はオベリスクを見ていない。理由は明解だった。彼等はオベリスクの取材に来たテレビカメラに群がっているだけだ。

「すごい人だね」

「邪魔つたらありやしねえよ。これじゃ部屋に入れやしねえ」

アパート——正確に言えばオベリスクの駐車場——に近付くにつれ人込みは密度を増して行き、ほとんど進むが出来なくなった。

「どつちにしろ、今アパートに入ったりしたら取材で大変だよ？」

「確かに……」

それでも二人は、何とか押し合いへし合いしながらアパートに近付いて行った。よっぽどこの町の住人は暇人なのか、この盛況ぶりは異常だ。

「あの人……」

アパートが見えるところまで来て、大石は思わず口走った。

「大石の住んでるアパートってあれ？」

ヒロミは、テレビクルーが二階住人に取材しているアパートを指さして聞く。

まさにそこは大石のアパートであり、取材を受けているのはなんとあの隣人だった。

「あの人、ほんと暇人だな」

「あの取材されている人？ 知り合い？」

「……隣の部屋の人」

「へー。なんかすごい喋ってるね。なんか専門家みたい」

そう。まさに専門家だ。取材側が圧倒されるほど、自信に満ち溢

れた表情で喋り続けている。

「その塔のことなら、おれよりあの人の方が詳しいよ。それができた瞬間は誰も見てないけど、あの方は直後からずっと見続けてるから」

ヒロミは大石と隣人を交互に見る。

「ずっと？ 朝から？」

「それができたのは昼前だけど、多分ずっと」

あれからもう5時間ほどは経つ。だが大石は、あの隣人がずっとオベリスクを見ていたのではないのかと、何となく思った。

「あの人学生じゃないよね？」

「さあ？」

「社会人？」

「さあ」

「働いてないの？」

「さあ……」

「隣の人なのに何にも知らないの？」

「……知らないな……」

ヒロミは驚いたように大石の顔を覗き込む。

大石はそれが普通だと思った。都会では隣人との付き合いなどそんなものだろうと。

「ヒロって地方出身だっけ？」

「うん。高千穂。それがどうしたの？」

「いや、別に」

「あ！ 他方出身者を馬鹿にしたろ！」

「別にそういうわけじゃない」

ヒロミは眉間にしわを寄せてしつこく聞いてくる。よほど自分の故郷に誇りがあるのだろう。

そんな話をしていると、野次馬の群集が大きく動き始めた。テレビクルーが移動を始めたのだ。

大石とヒロミは何とか流れを利用し、アパートへ近付いて行った。

ちょうどオベリスクの目の前に来た辺りで、野次馬がはけ、自由に動けるようになった。野次馬は半分以下になっている。

「ほんと大きいね……」

ヒロミが感嘆の息を漏らす。確かに、真下から見ると圧倒されてしまう。まるで天のどこまでも伸びているかのように感じる。

「なんだこれ？」

大石は足元のロープに気がついた。野次馬の大群に踏まれ、泥だらけでちぎれかけている。

「バリケード？ 警察が張ったのかな？」

ヒロミも足元を見る。

警察はこれを危険と判断したのだろうか？だがまったく役に立っていないし、回りに警官は一人もない。

「どうせ何か起きたときに、自分たちはちゃんとやったって、警察が言っただけのものだな」

「おい！ 大石君！ お帰り！」

声の方を見ると、あの隣人が手を振っている。

「こんにちは！」

ヒロミがあの大声で挨拶すると、隣人は目を丸くした。

「何か勘違いしてるんじゃないだろうな……」

大石は隣のヒロミに聞こえないほどの小声で言った。

一の六調

大石の予想とは裏腹に、隣人の部屋はかなり整頓されていた。不精な見た目からは想像しにくい。

しかし、整頓されてはいるが、部屋はかなり狭い。所狭しと、色々な物が置いてある。大型のデスクトップパソコン、壁一面の巨大な本棚、よくわからない民族的木彫りの置物、望遠鏡、謎の電子機器類。

だが不思議なことに、物が溢れているにも関わらず、生活感がほとんどなかった。

「深水さんって何されている方ですか？ 学生？」

ヒロミがいち早く的確な質問をする。いつの間に隣人の名前を知ったのだろうか？ 表札を見たのだろうか？ 大石も表札ぐらい見た記憶があるが、隣人の名前を音で聞いたのは初めてだ。

「うーん。フリーターかな一応。勤めてはいないけど収入あるし」

「この機械って何？」

「超微粒子量子振動検出機」

「これは？」

「共振動型時空振幅増機」

「あれは？」

「カオス式多次元干渉制御システム」

「ふーん。全然わかんない」

大石にもさっぱりわからなかった。わかったのは一つだけ。この部屋にはベッドも布団を敷くスペースもない。

「えと……深水さん？ほんとにここで生活してるの？ 寝る場所無いんじゃないですか？」

深水は、パソコンデスクの隣にある、何も乗っていないアルミ製の机を指差した。

「そこ」

大石はそれ以上何も言わなかった。

「それより！ あのオベリスクって黒い塔！ あれって何なんですか？」

深水が細い目を嬉しそうに一層細める。

「そう、オベリスク。テレビやラジオで聞いたと思うが、これを広めたのは僕だ」

大石はただ黙って二人の話を聞いている。

「オベリスクって確かエジプトの石塔ですよね？」

「らしいね。僕は名前を広げただけで、意味は知らなかったんだ。なかなかいい名前が思い付かなかった時に、大石君がああ塔を見てオベリスクって言ったのを聞いて、これだっと思ってね」

大石は大きな目を一層見開いて広瀬を見た。

「そうなの？ 大石！」

ヒロミも驚いたように大石の顔を覗き込む。

大石は直ぐに迷惑そうな、つまらなさそうな顔をして言った。

「そうでしたっけ？」

「工事の人達があの中にいると言ったのは、僕の考えだ。状況証拠ばかりだが、それしか考えられない」

深水は自分勝手に喋り続ける。

「先ず、工事の音とオベリスク出現時のものと思われる轟音、この二つの時間的差は数秒しかない。次に足跡等の痕跡だ。駐車場の地面はぬかるんでいたが、外に足跡がなかった。そして工事の道具や車輛が破片すら見つかっていない。これは全てがああオベリスクに取り込まれたとしか考えられない！」

大石は無表情のまま、ヒロミは目を見開いてうなづきながら、深水の演説を聞いている。

深水は更に熱く演説を続ける。

「次に、オベリスク自体の詳細だが。底面は正確な正方形で、面積は100平方メートル、各辺の誤差はなんと0.001パーセント以内。垂直方向も誤差0.001パーセント以内で垂直。高さは毎

時3センチずつ伸びている」

「伸びているのか？」

大石はようやく表情を変えた。

「ああ。超音波やX線を使って調べてみたところ、地中に埋まっている大きさは測定限界を越える」

「そんなに大きいのか？」

「全体像は想像がつかないな。材質は全く不明。というより変化し続けている。導体になったり不導体になったり、反発係数何かも変化している」

ヒロミの表情が固まりだした。そろそろ理解が追いつかないようだ。それでも文系にしてはよく着いて来ていると、大石は思った。

「一貫している特徴は、内部が全くわからないこと。超音波もX線も吸収したりしなかったりだが、吸収した場合、反対側に出てこないし、何かに反射して帰っても来ない。……これは極秘だが、内部はまるでブラックホールだ。吸収だけして何も出さない。質量計測も色々な方法で行ったが、どれも測定不能だった……」

演説が終わり部屋が急に静かになった。深水は二人の反応をうかがい、ヒロミは一生懸命理解しようとし、大石は何となく点滅を繰り返す機器を見たり小さな作動音に耳を傾けていた。

そのおかげか、大石だけがそれに気付いた。

「何の音だ？」

ジーという機器の微音に混じり、カチカチというアナログ時計のような音がする。この部屋にアナログ時計はなかった。デジタル機器に囲まれていたので、大石はその音に妙な違和感を感じた。

「こんな音を出す物ないぞ……」

深水は狭い室内を音源の方へ、機器類と二人を避けながら進んでいく。

「これは……」

「どうしました？」

ヒロミは座ったまま音の方を覗く。

「外へ出る！ 早く！」

深水が叫ぶ。

目を白黒させながらも、ヒロミは素早い身のこなしで外に出た。大石も多少もたつきながらも外に出る。最後に慌てて深水が出てきた。

「何です？」

「何かあったんですか？」

「いいから早く離れろ！」

深水に急かされ、三人はアパートから50メートル程離れた。

見上げた大石は、確かにオベリスクが高くなっているように感じた。

「何があつたんですか？」

ヒロミは同じ質問を繰り返した。

「……時限爆弾だ」

深水が息を切らせながら答える。運動不足にもほどがあるだろう。

「爆発しませんよ？」

「あれ？ あと30秒くらいだったんだが……」

「誰かのいたずらでしょ？」

「……そうだよな。いたずらか！」

強張っていた顔をようやく崩して、深水は腕時計を見てからアパートに戻り始めた。

「戻ろう。次の取材の時間が過ぎてる。何なら君らも一緒に受けるか？」

そう言った瞬間だった。

アパートが爆音と共に炎に包まれた。

三人共開いた口が塞がらなくなった。

アパートが火元は広瀬の部屋のようにだ。あっという間にアパートは巨大な火と煙の柱になる。オベリスクが二つになったかのようにだ。呆けている大石の携帯電話がなった。

『もしもし？ 済みませんね？ 広瀬さんの携帯が燃えてしまった

ようなので、大石さんにかけてもらいます。まあ今回は脅しなので、以後でしゃばらなければ危害は加えません。それでは』

大石が一言も喋らないうちに、一方的に電話は切れた。

「脅しだそうです」

大石の声は二人に届いてはいなかった。二人とも呆然と立ち尽くしている。

まだ若い男だったな。大石はさっきの電話の声を思い出していた。

一の六調（後書き）

第一部終了です。感想・ご評価をお願いします。

二の二 電話

住家と全財産を一度に失った二人の男は、都合良く女の家に上がり込んだ。

「そっちの部屋、二人で好きに使っていいから」

ヒロミが鍵付きのドアをさして言った。

ヒロミの部屋は、いわゆるルームシェア用のアパートだダイニングから二つの個室と玄関へのドアがある。なんでも、ルームメイトが出ていってしまい、新たなルームメイトを探していたところらしい。

当然、大石と深水も始めは断っていたが、二人ともツテも金も無いので、最後にはヒロミの好意を受けることにした。

「風呂とか食事とか細かいことはあとで考えよう。とりあえず、どうする？」

ヒロミの質問には俺が答えた。深水はさっきからコーヒーを啜りながら何かを考えている。

「今月のバイト代が入ったら直ぐに出ていくよ」

「そうじゃないでしょ？ もう少して死ぬところだよ？ オベリスキには秘密があるし、それを知りかけた私たちはずっと監視されるよ？」

ヒロミの言っていることは正しい。確かにやばい。だがどこか、楽しそうに、興奮しているように見える。横を見ると、深水はコーヒーカップを凝視している。

「深水さん、何考えてんの？」

「いつ爆弾を仕掛けたのかな？ 俺が部屋を出てたのは取材を受けたとき一回だけだし、その時も部屋の前にいたのに……」

「きつとその時にベランダから入って仕掛けたんだよ！」

ヒロミは得意げに言うが、深水は顔を曇らせたままだ。

「だとすればタイミングが良すぎないか？ いつ取材が俺の部屋で

つてなりかねないのに……」

深水とヒロミは黙ってしまった。

「それに、爆発の瞬間も取材の予定時間だったんですよね？ だと遅刻していた……」

大石の言葉に、二人は目を丸くする。

「まさか……全部やつらが仕組んだ……？」

深水は搾り出すように呟く。

「深水さん、取材してきたテレビ局ってどこですか？」

ヒロミは焦った表情で早口に聞く。

「どこだったかな？ あんまり聞いたことがないところだったけど……駄目だ。二つとも思い出せない」

ヒロミは大きく溜息をつく。

「ヒロ。テレビ点けていいか？」

「……え？ あ、いいよ」

大石の問いに一拍子遅れてヒロミは答えた。

ほとんどのチャンネルでオベリスクの特番をやっている。しかし深水の取材はどこも放送していない。それどころか、全ての番組が遠くからのオベリスクの映像を流すだけで、現地近辺の撮影が全くない。まるで、当局に封鎖された事件、事故の現場を遠目に取材しているかのようだ。

「あれは偽物だった？」

ヒロミの呟きに大石が答える。

「みたいだな。俺の携帯番号も知ってたし、もしかしたらここも危ないかもな」

「あてはないんだろ？」

深水が大石に聞く。

「ない。深水さんもでしょ？」

「ないな……」

二人は完全に黙ってしまった。

「うちに来る？」

ヒロミが意を決したように言った。

大石は眉間にしわを寄せ、怪訝そうに聞き返す。

「うちって、ここだろ？」

「そうじゃなくて、実家」

「流石にそれはまずいだろ」

「まだそんなこと言っつて。深水さん、今はそれどころじゃないですよ？」

本当に今はどういう状況なんだろうと、大石は何となく考え、思いついた質問を何となく聞いた。

「どこなんだ？」

「赤坂……」

深水が大袈裟に驚く。

「すごいとこだな！ 金持ちなんだ？」

「……うん、まあ。本当は喧嘩して家出てきたから、帰りづらいんだけど、そうも言っつてらんないし……」

大石も感心して言う。

「だからルームメイト無しでこんな部屋住めるのか」

ヒロミはばつが悪そうに答えた。

「うん、まあ。お祖父ちゃんに相談したら何とかしてやるって……」

「いや、でもなあ……」

深水はまだ渋っている。それはそうだ。危なかったとはいえ、ヒロミ自身は安全かも知れないのだ。大石もそこまで巻き込んでしまふのに抵抗を感じていた。

何の前触れもなく、流行りの歌手の歌声がダイニングに響く。ヒロミは慌てて電話に出た。

「あ、お祖父ちゃん？ ちょうどいいや。ちょっと相談があったの

……え？ テレビ？ ……大石、ちょっとテレビ点けて。5チャンネル

大石がテレビを点けると、自分のアパートの火事のニュースをやっていた。相変わらず遠目からの撮影だ。

「……繰り返します。警察は、このアパート住人の、大石嵩、深水

千尋、そして大石と同じ大学に通う宇高浩美を放火と殺人未遂の容疑で指名手配しました。なお……」

テレビを、信じられないという顔で凝視したまま、ヒロミは力無く電話の相手に答える。

「……うん。見てる。……わかった。直ぐに行く」

ヒロミが電話切った、まさにその瞬間だった。テレビアナウンサーの声がむなしく響いているダイニングに、インターホンがこだました。

二の二 老人（前書き）

ご評価、ご感想お待ちしております。

二の二 老人

「エイセイさん！」

ヒロミは訪問者をインターホンカメラで確認すると、直ぐに玄関へ向かった。どうやら警察ではないようだ。

「男だったな」

深水がにやつきながら大石を見る。

「余裕ありますね——」

二人が無駄話をする暇も無く、ヒロミは直ぐに戻ってきた。

「大石、深水さん。行きますよ！」

深水は状況を理解しているのか、していないのか、直ぐに倒れ立ち上がって質問をした。

「何処に？」

「だから、うちの実家ですよ。急いで」

そう言うヒロミは、もう玄関へ小走りで向かった。二人も慌てて付いていく。

「三人共急いで下さい」

玄関に立っていたのは、深水よりやや年上と思える、三十前くらいの男だ。

男はそれだけ言っ、挨拶もせず歩きだす。真つ黒のスーツに身を包み、短髪を撫で付けている身なりと、何かを警戒しているような物腰と目付きは、まるでボディガードのようだ。

特に何も無く、無事にアパートを出て、男の車に四人は乗り込んだ。車を出すとようやく男は二言目を発した。

「挨拶が遅れました。わたくし、宇高衛正と申します。衛星の衛と正しいと書きます」

「宇高？ ヒロのお兄さんか？」

大石は思わず、男とヒロミを見比べた。やや痩せ気味の角張った輪郭と、太ってはいないが丸みのある女の輪郭。鋭い切れ長の目と、

大きく丸い目。その他諸々、まったく似ていない。

苦笑いしてヒロミが答える。

「違うんだけど……あとで説明するよ」

衛正は始終緊張したまま運転していたが、何事もなく目的地についた。そこは赤坂どころか、多摩の奥地だった。

「お待たせしました。間もなくです」

何を聞いても、今は答えられないとしか言わなかった衛正が、珍しく自分から口を開いた。

「ようやくか」

時刻はとうに日を跨ぎ、うたた寝をしていた深水が目を覚ました。
「田舎って言うより山奥だな。どこだ？ 長野？ 山梨？ それとももつと遠くか？」

後部座席に座ったまま、身体のアチコチを伸ばしながら深水は聞く。

「東京です」

衛正はあくまで簡潔に答える。

「ここ東京？」

道は砂利、窓の外に見えるのは星明かりと漆黒の森。深水が疑問に思うのも無理はない、そう大石は思った。

「なあ、衛正さん。いい加減どこに向かっているのか教えてくれよ。どうせもつとすぐ着くんだろ？」

衛正の返事はやはり同じだった。

「答えられません。間もなく着くのですから待っていて下さい」

「杓子定規だなあ——」

二人のやり取りを大石は聞き流していた。車に乗り込んでからは一睡もせず、会話以外の時間は、大して代わり映えのしない景色を眺めながら何かを考えている。

車が止まった。別荘とも山小屋とも言えない、小さな木造の小屋の前だ。

「着きました。……ヒロミさん、起きてください」

助手席のヒロミは、衛正に揺すられて目を覚ました。

「やっのご飯？」

本気なのか寝ぼけているのか。しかし、確かに大石や深水も空腹だった。ヒロミのアパートを出てから、ほぼノンストップでここまで来たのだ。

「軽くでしたら私が用意しますから。さあ早く。父がお待ちです」

衛正に連れられ、三人は小屋の中に入っていった。一応は別荘と言える造りだ。小さいながらもちゃんとした玄関だった。

だが大石は不審に思った。ダイニングへのものと思われるドアが、異様に頑強そうなのだ。表面は化粧板が貼られているようだが、廊下に対して大きすぎるそれは、金庫か古い蔵を思わる。ちようつがいなどの接合部は全て内部に組み込まれ、外からの侵入を拒んでいるようにも見える。

衛正は照明も点けずに、星明かりを頼りに廊下を進み、大きなドアノブに手をかけた。よく手入れされているのだろう。重そうな扉は以外なほどすんなりと開き、室内の光をこぼしていく。

「遅かったな」

光の中から声がする。まだ目が慣れず、姿は見えないが、どうやら老人のようだ。

衛正が光の中へ入って行き、ヒロミ、深水、大石も後に続いて入る。

「心配したぞ、ヒロミ」

「久しぶり！ おじいちゃん！」

中にいたのは六十は越えていそうな老人だった。

「衛正、戸を閉める。明かりが漏れる。……まあ無事でなによりだ。どっちが深水君でどっちが大石君だったかな？」

部屋の中心の椅子にかけたまま、老人は二人を見た。

「俺が深水です」

「……大石です」

「二人共大変だったな。まあここなら大丈夫だ。とりあえず旅の疲れをとってくれ。衛正」

名前を呼ばれ、目配せを受けたただですぐに衛正は動いた。部屋の端に寄せられていたテーブルを老人の前に配置し、椅子も四つ追加した。そして老人にそつと耳打ちし、奥のキッチンへ向かった。

耳打ちされた老人のほうは、思い出したように自己紹介を始めた。「済まん済まん。自己紹介が遅れたな。昔の癖で自分のことは誰でも知っていると思ってしまう。私は宇高兵衛という。聞いたことはあるだろう?」

大石と深水は椅子に座り、お互いの顔を見た。それを見たヒロミが吹き出した。

「おじいちゃん! 今の人は宇高なんて知らないよ」

兵衛老人は驚きやら消沈やら怒りやら、色んな感情を代わる代わる顔に出して言った。

「ヒロミ! 今はお前も宇高の人間なんだぞ! それに、今の人などという言葉は私に使うな! 私も今の人間だ!」

今度は深水が吹き出した。ヒロミもまた笑い出す。つられて、大石や兵衛老人も笑い出した。

それを断ち切ったのは衛正だ。雰囲気を読めていないのかと思える冷静さで、兵衛老人を諷めた。

「大父、リラックスするのはよろしいですが、緩んでいられる状況ではありませんよ」

衛正はテーブルに人数分のお茶と取り皿、それと山盛のスパゲッティを置いて椅子に座った。

「まあ後でいいだろう。さっきも言ったように、取りあえず疲れをとってくれ。さあ、腹が減ったろう?」

「いただきます!」

ヒロミが勢いよく食べ始める。大石と深水も空腹を思い出してフオークを伸ばした。三人共、考えたり警戒したりは休み、今は食べることに集中する。

兵衛老人は嬉しそうに眺め、衛正はやっと少し緊張を緩めたように椅子に深く座り、お茶をすすった。

二の三 決意（前書き）

ご感想、ご評価よろしくお願いします。

二の三 決意

三人が食事を終えるのを待つて、兵衛老人は切り出した。

「さて、詳しい話は明日にしようか？ それとも今すぐがいいか？」

深水が間髪入れずに答える。

「今すぐでお願いします」

疲れていたが、大石も同じ意見だ。一刻も早く状況を理解したい。

「そうだな。何から説明したものか……」

兵衛老人は天井を見上げて、話を頭の中で整理し始める。

大石は先ず、自分が最も気になっていることを聞いた。

「あれは一体なんなんです？」

目を天井でしばらく泳がせた後、兵衛老人は大石を見て答えた。

「あれの正体か。それはまだ私にもわからん。ただ、奴らは知っているようだ」

「やつらって？ 私たちを脅した……警察？」

ヒロミがテーブルから乗り出して聞く。

「そうだ。いや、正確に言えば政府だ。警察はあくまで手足で動いているだけだろう」

「俺達が追われているのは、やっぱり俺がオベリスクを調べようとしたからですか？」

気まずそうに聞く深水に、衛正が答える。

「それも少なからずあるでしょうが、あの時アパートにいた住人を全員、拘束するか殺すつもりようです。他の住人は全てそうなりました」

深水と大石は驚き、今更ながらに恐怖を感じて黙ってしまった。

「警察ってあんな無茶苦茶やるの？ 爆弾使うなんて……」

ヒロミが聞く。確かにやり方が異常だった。

「警察はもつと末端で動いている。あれをやったのは別の組織だ。因みにテレビの放送は私がやらせた」

兵衛老人が自慢げに言い、大石と深水が理解できずに間抜け顔で聞き返す。

「どういうことですか？」

「あの放送は、警察より先に私が情報をつかんで流させたものだ」

兵衛老人は自慢げに言った。

「やっぱりね。警察が私の部屋に来るより先にテレビで報道されるなんて変だと思った」

ヒロミだけが訳知り顔でいる。

「どういうことだ？」

二人は同じ質問を繰り返す。それには衛正が答えた。

「大父はマスコミに強い影響力を持ち、政府の各機関にもコネクションがあるのです」

詳しいが要領を得ない答えに、ヒロミが付け足す。

「おじいちゃんはテレビ業界の超大物なんだ」

兵衛老人は益々自慢げに嬉しそうに言う。

「宇高と言えば、世界で有名な日本人の一人だぞ」

深水は不思議そうに聞く。

「知ってる？」

大石は怪訝そうに答える。

「いや、聞いたことないですね」

兵衛老人はあからさまにがっかりした。

「だから言ったじゃん。知ってるわけないって。それより、組織って何？」

ヒロミは自分の祖父を冷たく突き放し、質問を続ける。

「簡単に言えば秘密諜報機関だ。奴らは手段等を選ばんし、特別権限も多く持っている。気をつける」

深水が恐る恐る聞く。

「特別権限って……？」

兵衛老人が言葉を選んでいる間に、衛正が率直に答えた。

「殺人や破壊工作、情報操作を含む、あらゆる権限です」

一体自分は何をしたのか。大石はもう一度考えた。何故こんな目に会っているのか到底理解できなかった。

兵衛老人は三人を落ち着かせるように優しく言った。

「お前達は事がおさまるまで安全なところで保護してやる。政府とは私が話をつける」

その申し出をヒロミは即答で断った。

「いや。おじいちゃんには悪いけど、誰かに守ってもらったり世話になったりはできるだけしたくない。自分で何とかするよ」

兵衛老人は怒りを押さえつつ諭すように言う。

「馬鹿を言うな。子供が何とかできるレベルの話じゃない。いいから任せておけ」

「そりゃ私が何とかできるレベルじゃないかも知れないけど……隠れているのは絶対にできない。自分から解決のために何かしたいの！」

今にも怒鳴りそうな顔で、兵衛老人はしばらくヒロミを睨んでいた。そのうち根負けしたのか、溜息を一つ吐いてから口を開いた。

「仕方がない。勝手に動かれるよりましだ。ただし私から離れるなよ」

「ありがとう」

ヒロミは満面の笑みを浮かべ言った。

「やれやれ。誰に似たのか……。安心してくれ。君らの安全は保証する」

兵衛老人は今度は二人のほうを見て言った。

それを深水もあっさりと断った。

「俺もお断りします。あいつらには高い機器を全部壊され、データもサンプルも全部燃やされました。黙ってられません」

深水が始めて怒りの感情をあらわにした。

「それにオベリスクの正体を確かめないと気が済みませんし」

不適に笑う深水を見て、呆れ顔で兵衛老人は首を振る。

「懲りないな。それで死にかけたというのに。何かあったら私は最優先でヒロミを助ける。君の安全は保証しかねるぞ？」

「構いません」

いい加減にしてほしいという顔で、兵衛老人は大石を見る。

「まさか君も来るとは言わんだろうな？」

決まっている。安全なところで隠れているのが一番利口だ。

「行きます」

大石は自分で自分の言葉に驚いた。別に見栄を張った訳でも、二人に合わせた訳でもない。何故かそう言ってしまったのだ。しかしそれでも、後悔はなかった。

兵衛老人は一層疲れた顔になった。なんだか十は年を取ったように見える。

椅子をひき、急に衛正が立ち上がった。顔に緊張が満ちている。

三人は戸惑い、兵衛老人だけが同じく緊張気味に衛正に問い掛ける。

「どうした？」

「しっ！ お静かに……」 部屋を沈黙が包む。

何か聞こえる。風のような、空気を叩く音。

音を確認すると、衛正はいきなりテーブルを動かし始めた。そして床の何かを探してはいつくばった。

音が大きくなる。あれはヘリコプターの音だ。

「奴らにここがばれたようです」

そう言つて衛正は床の一部を押した。電子音と金属音がし、フロアリングの板が少し持ち上がった。隙間に手を入れ、衛正が一畳程の板を持ち上げると、下にはセラミックス製のような扉があった。一見すればただの床下倉庫だが、扉には電卓のようなものが埋め込まれている。

衛正は素早くボタンを押し、手の平を押し付けた。小さな電子音がしたかと思うと、機械音と同時に扉が少し浮いた。衛正は再び隙間に手を入れ、扉を持ち上げる。今度の扉はかなり思いらしく、なかなか体格のよさそうな衛正でも、ゆっくりとしか動かなかった。それも理解できる。持ち上がった扉は、厚さが30センチメートル

はある。

兵衛老人がまた自慢げに言う。

「こんなこともあるうかと作っておいた。この部屋自体も並の銃や炎じゃびくともしないが、この扉は爆弾でも傷もつかん」

もうヘリコプターは真上に来ている。

ヒロミは不安げに聞く。

「こんなことって？」

「組織です。さあ早く」

衛正に急かされ、兵衛老人、ヒロミが扉のなかに入って行く。ヒロミは完全に扉に入る前に、頭だけ出して聞いた。

「衛正さんは？」

「私は最後に行きます。御心配せずに早く」

心配そうにしつつも、ヒロミは扉の下に続く梯子を降りて行つた。続いて深水、大石と、梯子を降りる。大石の頭が入ると同時に、爆音がし、部屋が揺れる。そつとのぞくと、入り口から武装した軍人のような連中が入って来る。そのなかの一人が口を開く。

「久しぶりだな正護。今は衛正だったか？」

銃口は全て衛正に向けられている。

「撃つなよ。こいつのことだ。体中に爆薬を着込んでるぞ」

隣にいる、副官らしき男が聞く。

「ならやつを撃ちますか？」

銃口が大石に向く。

「止めておけ。こいつの目的は宇高の人間の安全だ。下手なことをすれば今すぐにでも自爆するぞ」

怒りの形相の衛正がやつとしゃべった。

「大父を裏切った外道め」「言いたいことはそれだけか？」

衛正は相手を無言で睨み返し、次の瞬間大石の方を見た。

大石は意図を悟り大急ぎで梯子を降り始める。

「逃げます！」

「止せ！」

あいつらの声が聞こえる。

服を脱ぐようなきぬ擦れの音が聞こえ、大石は思わず上を見た。

大石は驚きの声を上げる。衛正が落ちて来たのだ。大石にぶつかる寸前、扉の閉まる音共に衛正の体が空中で止まった。

「爆弾を仕込んだスーツを点火して投げ付けてやりましたが、このくらいではやつには時間稼ぎにしかありません。急ぎましょう」

珍しく多弁にしゃべりながら、衛正は扉に鍵をかけた。

他の三人はもう下まで降りたようだ。大石と衛正は赤い小さな電灯しかない穴を、まるで奈落に向かうように降りて行った。

二の四 水中

深い縦穴を降りて行った先には、大きな地底湖があった。薄暗い照明は梯子の側にしかなく、奥に続く湖の全体像をつかむことはできない。

「でつかい……。あ、あれって潜水艦？」

ヒロミが20メートル程先の水面に浮かぶ影を指差した。

「そんな馬鹿な。地質学的にこんなところにこれほどの地底湖ができるなんて有り得ない」

深水はヒロミが指差す影を見るというよりは、湖全体を眺めながらつぶやく。

「人工みたいですな」

大石は天井を見上げながら言った。

光がほとんど届かず、うつすらとしか見えないが、鍾乳石などの影が見えない。

「その通り。驚いたか」

兵衛老人が相変わらず自慢げに言う。

衛正は降りて来た梯子を見上げ、ポケットからリモコンのような物を取り出して言った。

「あの扉もいつ破られるとも限りません。出発しましょう」

衛正がリモコンを操作すると、波を立てて潜水艦が浮上した。五人に対して側面を向けているため、全体を把握することができた。長さは20メートル程だろうか。明かりがくらいせいもあるだろうが、黒っぽいそれは、まるでクジラのようにも見える。

潜水艦は横を向いたまま、ゆっくりと五人のほうにやって来る。

「狭い地下水脈のために特注で造らせた。自慢の船だ。ただ残念なのは、操縦できるのが衛正を含めて五人しかいないのと、この目的地の往復しかできないことだ」

「すっごい！ 潜水艦なんて始めて乗る！」

ヒロミが珍しく兵衛老人を素直に讃えた。

「そりゃ、こんなどこでも走らせていいことはないでしょう。日本は、川は狭いし、法律は細かいし……」

深水も感動したように潜水艦に見入っている。

「目的地ってどこです？」

大石の問いに、兵衛老人はいたずらを思い付いた子供のような笑顔を返した。

「そりゃ、お楽しみだ」

機嫌がかなりいい。さっきまで三人が着いて来るのを反対していたのが嘘のようだ。

大石の足に冷たい水がかかる。潜水艦がもう、すぐ側に来ていた。衛正が梯子の一部を取り外して、潜水艦までの橋としてかけた。今度は先に行って潜水艦の入り口を開け、四人のほうに手を伸ばした。

「さあ、どうぞ」

全員が乗り込み、無事出発するまで、追っ手は気配も感じさせなかった。

ある程度覚悟はしていたが、潜水艦の内部は予想以上に狭かった。兵衛老人によれば、本来三人程度が乗るように設計したのだという。それでも、深水とヒロミは操縦席に張り付き、深水は様々な計器について衛正に質問し、ヒロミは衛正が触るレバーやらスイッチやらを触りたがった。

衛正は、ほとんど無言で返していたが、二人はお構い無しに勝手にしゃべり続けた。

兵衛老人は嬉しそうに時々自慢をし、大石は相変わらず何かを考えていた。

一時間も経たずに目的地に着いた。出発したところと、ほとんど様子は同じだ。違いといえば、梯子ではなく、上に続く階段があること。

階段はそれほど段数を登らずにすんだ。螺旋状の階段を一、二階分昇登ると、やはりボタン付きの扉が現れた。

扉の先は殺風景な部屋だった。

深水が壁際の機械のいくつかを見て言った。

「水質検査の建物か？」

兵衛老人が先に進み、出口らしきドアのノブに手をかける。

「その通り。外に出ればもつとはっきりとわかるだろう」

ドアを開けようとする兵衛老人を衛正が慌てて制止する。

「大父、私が行きます」

「心配するな。やつらが来ているならなら、外ではなくここで待ち構えている」

兵衛老人がドアを開けると、目を開けていられない程の光が飛び込んで来た。

「あれが何かわかるか？」

兵衛老人の言葉に、大石は薄目を開けて見ようとする。もうすっかり日が昇ったのだ。目が慣れて最初に見えたのは、あれだった。

「嘘……」

ヒロミが言葉を漏らす。

「まさか……信じられない」

深水はふらふらとドアの外に出た。それにつられるようにヒロミも、そして兵衛老人と衛正も外に出る。

大石だけがその場から動けずにそれを見ていた。

朝日を反射して光り輝く湖の水面から、それは天空を突き刺すように伸びている。朝日の影となり、一層深い黒のそれは、今や100メートル近くの高さではなからうか。

大石と深水のアパートの隣に突如現れた、オベリスクと名付けられた塔。それと全く同じ物がこんな山奥にもある。

大石は結局、一言も言葉が出てこなかった。そのかわり、ずっと考えていたものが、何か形になってきた気がした。

二の五 水上

岸から数百メートル先の水面にそびえ立つそれは一点だけアパートの横に建った物と異なった。

大石たちは岸からそれを見上げていた。兵衛老人が感心しながら言う。

「また高くなつたな」

このオベリスクは既に200メートルを越えているだろう。太さは同じようだから、こうなると塔と言うより棒だ。

「同じオベリスクなんですか？」

深水の質問に兵衛老人が嬉しそうに答える。

「人間が調べられる分析方法では全くの同一体。各辺の長さ、角度、高さ。僅かな誤差すら無い」

「高さつて……全然違うじゃん」

ヒロミの疑問には深水が答えた。

「オベリスクは徐々に高くなっていた。つまりあっちのオベリスクもこれと同じ高さになっている……。そういうことですね？」

「理解が速くて助かるな。そうだ。あれは全て、同じタイミングで同じ分高くなっている」

兵衛老人の言い回しに気になるところがあり、大石は聞いた。

「全て？ まだ他にもあるんですか？」

兵衛老人はなぜか、失敗したというような顔をし、渋々口を開く。

「……全部で八柱だ」

その言葉に大石が何か返そうとしたが、衛正がいきなり会話を止めた。

「無駄話は後にしましょう。ここもあの町同様封鎖されています。ようは敵地にいるようなものです」

ヒロミは疲れた顔になって文句を言う。

「また逃げるのか……」

「その前に…… あれを側で見れませんか？」

大石の愚問に、衛正は呆れるというより驚いて答えた。

「奴らはあれを監視してるんですよ！ 自ら捕まりに行くようなものだ」

残念そうな大石を見て、兵衛老人は口の端を上げた。

「面白い。衛正、どうせ強行突破するのだろう？ 行かせてみる」

「大父！ 何を？」

衛正は信じられないという表情で兵衛老人と大石を見比べた。

「確かにここからの経路はやや強行ですが、それにしてもその行為は無謀です……」

衛正の言葉を遮るように、兵衛老人は有無を言わさぬ鋭い目で衛正を見た。その口元は、何かを企むように歪んでいる。

衛正は一瞬、兵衛老人とアイコンタクトを取り、まだ不満そうだが、妙にあつさりと言った。

「より可能性の低い賭であるとお忘れなく」

大石には何が賭であるのかわからなかった。ただ、あれを側で見ただけだ。

「俺も行かせてください」

深水の希望を予測していたように兵衛老人は言う。

「まあ、いいだろう」

「私も……」

「ヒロミ、お前は駄目だ」

ヒロミの意思は、兵衛老人に頭から否定された。

「なんで！」

「危険だと言っているだろう」

言葉は少ないものの、その真剣な表情はヒロミの言葉を完全に封じてしまった。

大石と深水の感心はすでにオベリスクに向けられ、兵衛老人のそんな態度に気が付く余裕はなかった。

岸には、捨てられたボートが一隻あった。大分古いようだが、幸い穴などは開いておらず、何とか使えそうだ。

「くれぐれもお気を付けください」

二人がボートに乗り込むと、衛正はそう言っただけでゆっくりと押した。ボートがゆっくりとオベリスクに向かって進む。二人はボートに残されていた今にも折れそうなオールでボートを進める。

「ところで、ここってどこですかね？」

大石が不意に思った疑問を口にする。

「風景とかさっきの地下水道とか考えると、多分奥多摩湖だろ」

深水はすでにオベリスクに目を奪われたまま答える。

大石はその言葉を確認するように辺りを見回す。岸にヒロミたちの姿はなくなっていた。それを不審に思いながらも、大石は水をかいた。

オベリスクまであと100メートル程に迫った。その高さに圧倒される。先端を見上げていると首が疲れるほどだ。オールを持つ手の動きが鈍くなっている二人を、その声が現実に戻した。

「そのボート。直ちに引き返さない。今この湖は一般人の立ち入りが禁止されています」

スピーカーからの声だ。深水は一瞬オベリスクから目を離し、大石を見た。その目には決意が込められていた。次の瞬間、二人は全力でボートを漕ぎ出した。

「停まりなさい！ その物体は非常に危険です。停まりなさい！

……警告に従わない場合は発砲します！」

それでも二人は水をかき続けた。

遠くで破裂音がした。それと同時に、ボートのほんの2、3メートル先で水が跳ねた。

それでも二人は止まらない。異様な興奮状態にあった。それが危険によるものなのか、オベリスクに近付いたことによるものなのか、二人に判断は出来なかった。

ついに1メートル先で飛沫が上がる。しかしオベリスクまでです

に10メートルもない。そこからはもう、銃撃も放送も無くなった。近付いて見ると、やはり質感等はあのオベリスクとそっくりだ。だが、大石にはそんな詳細なことよりも、この巨大な物体自体に異様とも思える畏怖の念を抱いていた。真下から見上げると、まるで天を支えているか、天を貫いているかのようだ。

他の何をも忘れてオベリスクを見入る大石を、深水の叫びが現実呼び戻した。

「大石君！ 船を止めろ！ ぶつかる！」

正面を見れば、どんどん黒い壁が迫って来る。すでに3メートルもない。二人は必死にボートを止めようとしたが、さっきまで全力で進めていたものが急に停まるはずがない。

「ぶつかるぞ！」

こういう時は水中に飛び込めばよかったのだろうが、二人は体が硬直してしまった。ぶつかったと、二人が思った瞬間、何の衝撃もなく、世界はただ漆黒の闇に包まれた。

「なに！ どうしたの？」

林の中からボートを見ていたヒロミは、思わず上ずった声を上げた。ボートがオベリスクにぶつかったと思った瞬間、ボートが消えたのだ。いや、それは正確ではない。ぶつかる瞬間にオベリスクが一回り太くなり、ボートはそこに沈み込むように音も無く滑りこんだのだ。そして次の瞬間には、オベリスクは元の太さに戻っていた。水面には、ただボートが消えただけのように、ボートが進んだことで生じた波しかない。オベリスクが太くなったことで波は生じなかったのだ。

突然サイレンが鳴り響いた。オベリスクを挟んで反対側の岸に何人も人間が現れる。それを見計らい、衛正は言った。

「今のうちです」

ヒロミは信じられないという顔で見る。

「二人は？ どうするの？」

衛正は何も答えずヒロミの顔を見る。そこからは残酷な決意が読み取れた。

何も言わない衛正に代わり、兵衛老人が口を開いた。

「何かあればお前を最優先に言ったろう」

「困にしたの？」

ヒロミの目には、怒りと僅かな涙が浮かんでいた。

「そうしなければ私達三人も逃げられない。犠牲は二人で充分だ。急ぐぞ」

まだ何か言おうとするヒロミの口を、衛正が塞いだ。ヒロミはもがいて振りほどこうとしたが、衛正はそのまま塞ぎ続けた。やがて息が続かなくなり、ヒロミは意識を失った。

気を失ったヒロミを衛正は背負い、兵衛老人と無言で目配せすると、何も言わずに林の奥へと進んで行った。

衛正の姿が見えなくなると、兵衛老人はオベリスクの方をまた見て呟いた。

「封印か……」

オベリスクの周囲には、十隻以上のボートが取り巻いてなにやら作業を始めていた。

二の五 水上（後書き）

ご感想ご評価よろしくお願いします。

三の一 昔之夢

大石は夢を見ていた。昔から時々見る夢だ。

自分の手の何倍もあるような大きな手が、大石の手を引いて行く。見上げると、そのあまりにも大きな人が、まるで山であるかのように錯覚する。大きな人は大石を見ようとしめない。

大石は顔を覗きこもうとする。しかし引きずられないようについていくのがやっとで、とても正面に回り込むなど出来なかった。

だが、そんなことをするまでもなく、本当はその人が誰なのかわかっていた。これは父親だ。理解等の思考によってわかった訳ではない。ただ何となく——しかし確信を持って——父親であると、わかっていた。

大石はただ父親の顔が見ただけだ。

歩き続ける今はなき父親。幼い頃に亡くなった父親のことはあまり覚えていない。こうして時々夢に現れる父親のイメージは、ただただ大きく、顔や他の細かなことははっきりしない。

父親が向かっているのは、大きな門だった。20メートルはあるように見える。その頂点には、人間など一飲みにしてしまいそうな大口を開けた獅子の像がある。

半分覚醒した頭で大石は理解した。これは夢であり、父親との唯一の思い出である動物園に行った時の記憶だ。

手を引かれて門をくぐる。中には、まるで高層ビルのような檻が並んでいる。

大石は当時感じたことを、今もありありと感じた。大きな大きな父親の、そのまた何倍もあるような獣たちが、巨大な檻の中で、唸り、吠え、歩き、跳びはねている。大石は恐怖と感動がごちゃまぜになり、泣き出した。

泣きながら動物園の奥へと進んでいく。いつの間にかビル群のとき檻が姿を消した。振り向いても、何も見えない。正確に言えば、

ただ漠とした何もない地と空が広がっているだけだ。

正面に向き直り、大石は気付いた。今までの檻を遥かに上回る大きさの、山のような高さの柵に向かって歩いていく。いつの間にかすぐ側まで来ていたが、大石はあと数歩、どうしても柵に近づけなかった。柵の中には千尋を思わせるような深い堀があり、獣はの先に悠然と立っている。

柵の高さを越える程の、正に山という形容が相応しい巨大な象だ。象は大石を見もせず、微動だにしない。大石の存在に興味がなく、また気付いてすらいないだろう。微かな動きも見せない象は、一見生きていないようにも見える。

ただ大石は、象の呼吸によって起こる大気のうねりを感じ、生き物が発する独特の存在感を確かに感じ取っていた。

同じ空間、同じ時間にいながら、大石と象は全く違う世界にいた。象は大石から何の影響も受けず、存在にすら気がつかない。大石などいないも同然だった。

大石は象の存在にすら圧倒され、象がそこにただ居るだけで大石はあらゆる影響を受けた。それは自然現象のようなものだった。

いつの間にか、父親も柵も消え、あるのは大石と象だけになった。自分の意思とは関係なく、大石は象から目を離せなくなり、見つめ続けた。

一瞬。本当に瞬きをするほどの時間。気がつくとも象は姿を消し、そこにはオベリスクが立っていた。

象と同じく存在感を放ち、ただあるだけで大石に影響する黒い塔は、徐々に高く、太くなっていった。

大石は踵を返し、走り出した。夢だからだろう。後で見えないはずのオベリスクが迫ってきているのがわかった。どんどん、どんどん大きくなる。もはやただ一面の壁となり、大石の背に肉薄している。

壁が確かにぶつかる感触を味わった。それはとても夢とは思えなかった。

三の二 塔之中

深水が大石を揺り起こした。

大石は状況を理解しようと、せわしなく頭を動かして周りを見る。水面に浮かぶボート。大石と深水はその上で向かい合って座っている。

大石には、自分で観察しただけでは状況が理解できなかった。

「ここはどこだ？ どうなったんだ？」

深水は、自分も信じられないという顔で答える。

「オベリスクの中だ」

大石はあらためて周りを見た。およそ10メートル四方の——いや、正確に一辺10メートルの正方形だろう——小さな池は、周囲が完璧に磨き込まれた鏡で囲まれている。

「大石君は、数秒だが気を失ってたよ。入る瞬間妙な圧迫感があったから、そのせいだろう」

確かに、オベリスクにボートがぶつかると思った瞬間、壁が迫って来て一瞬何も見えなくなった。そのまま気絶してしまったのだ。

「中……空洞だったのか」

大石が何気なく見上げると、小さな四角い天井が白く輝いている。完全に空洞だとすれば、天井も100平方メートルあるはずだが、数百メートル上空のそれは小さく見え、まるで四角い月や太陽のようだ。

「馬鹿な仮説だけだな、あくまで推測だからそのつもりで聞いてくれ」

深水がボートを進めながら言う。

「またぶつかりますよ」

縁にしがみついて大石が身構える。

「大丈夫だ」

ボートは鏡にぶつかって止まり、何も起きなかった。

深水はオールで鏡を叩きだした。オールは衝撃で振動して音を発したが、鏡自体は音を出していないようだ。まるで巨大な硬い岩の塊を叩くような音だ。

「俺は直接オベリスクに触ってはいないが、表から調べた物理的性質と、この衝撃に対しての振動、そして厚さから考えると……」

深水は鏡の方を見たまましゃべる。

「これはおそらく物質の壁ではない」

「どういう意味ですか？ 壁じゃないんですか？」

「人類が今まで出会ってきたどんな壁とも違う。この壁は多分、時空そのものだ」

大石は全く理解できず、質問を続ける。

「わかり易く言ってもらえませんか？ 遠回しに言わないで」

「つまり、この壁の内部は非常に時間の流れの遅い空間なんだ。だから異常に硬くて、素材も質量も解析不能。時間の流れを元に戻せば抵抗なく通常の空間と変わらなくなる」

「一辺に言われてもわかんないすよ。……てことは、これは時間の止まったただの空気の壁なんですか？」 大石は必死に頭を働かせ、自分なりに解釈しようとした。

「そう。ここは空気」

そう言っただけで深水はオールで壁を叩く。

「それで、ここは水」

今度は水中にオールを入れて壁を叩いた。

「元の空間にあったものが、時間の流れを止められただけだ。だから地中は石や土だろう」

大石は漸く理解が少しでき、余裕を持って次の質問ができた。

「なんで鏡なんですか？」

「おそらく空間の保護のためだろう。もし、時間の流れが極度に遅い空間に光が入ったら、光のスピードも遅くなる。しかし後から光は続く訳だから、押し縮められて周波数が異常に高くなってしまう。

つまり、可視光線ですら簡単に放射線になってしまい、空間の時間の流れを元に戻した瞬間に大気が核爆発を起こす」

「俺達が入った瞬間にそれが起きなかったってことは……」

「全ての電磁波、光線を反射するようにしてあるってことだ。時間を完全に停止させればそんなこと考えなくてもいいが、それは相対論に反する」

大石は再び天井を見上げて言った。

「でもそれって誰かが意図的に造ったってことですよね？」

「君はこれが自然にできたとも思っていたのか？ これは明らかに建造物だろう」

深水も興味深そうに上を見た。

「それはそうですね……。そう言えば、表は鏡じゃなくて真っ暗でしたよね？ 光を吸収したら核爆発じゃないんですか？」

「赤外線から紫外線、放射線まであらゆる電磁波、光線を吸収していた。……時々ね。表はさっぱりわからない。状態が全く安定しなかったからな。どうやら二重構造で、この遅い時空間の外側に別の時空間があるようだな」

深水まだ熱心に明るい天井や鏡の壁を観察しているが、大石の方はいい加減頭が痛くなってきた。考えることが多すぎる。

「ところで、どうやって出られるんですか？」

深水はやっと観察を止め、大石を見た。

「それは問題だな。この壁は物理的に破壊は不可能だ。だけどのんびりもしてられない」

深水の言葉に、大石の顔が不可解から不安に変わる。深水は続ける。

「ここも時間の流れが正常とは限らない。下手したら浦島太郎になりかねない」

大石は自分の顔から血の気が退くを感じ、周りの温度が5度は下がったような気がした。

「出られるとすればあそこだな」

深水は天を仰いだ。ここの唯一の光源である、白く光る天井はさつきよりも小さく見える。

「あそこだけは時空間が正常のはずだ。出なければアパート前のオベリスク周辺には土や工事機材が散乱していた。あそこから空間を吸収しながら伸びてるとすれば、この中に空気や水が外と同じように存在していたことも納得がいく」

深水の言うことは納得できた。しかしあそこから出られるなど、大石にはとても考えられなかった。

絶望的に上を眺めていると、更に天井が小さくなった気がした。

三の三 水之下（前書き）

前回から大分間が空いてしまいすみません。御評価、御感想よろしくお願いします。

三の三 水之下

大石と深水は全身ずぶ濡れで、ボートに寝転んで天井を見上げていた。

二人の感覚で一時間程、何の取っ掛かりもない鏡の壁を登ろうという無茶をしたのだ。目測で300メートル以上の垂直の壁。不可能に決まっている。

しかし、大石にはじつとしているなどできなかった。小柄で軽い大石は、1、2メートルはなんとか登れた。四角の角で、直角に面した壁に手足を突っ張って登るのだが、直ぐに滑って水面に落ちる。始めは呆れた様子で見ていた深水も、がむしやらな大石に感化され、登り始めた。

そうして疲れ果てた二人は、ボートの上で仰向けに寝ていた。その状態のまま、大石は深水に言った。

「思ってたんですけど……あそこの空間が普通で外とつながってるんなら、ここの時間とかも外と同じなんじゃないんですか？」

深水も仰向けのまま、顔も動かさずに答えた。

「伸びる時だけ通常になるのかも知れないだろ。あっちのオベリスキは不連続的に伸びてただろ」

「何怒ってるんですか？」 深水の言い方には刺があった。

「こんなの登れるわけがない。時間と体力の無駄だった」

よほど腹が立ったのか、深水はそれから黙ってしまった。

大石は寝転がりながらも、何か方法がないか考えた。天井まで登ることは不可能。壁を破る方法は皆無。溜め息をつきながらうつぶせになり、何気なくボートの縁から水面を眺める。

魚の姿は見えない。よどみ、濁った水は、1メートル程の深さまでしか見えない。

「下ってどうなってるんですかね？」

深水は答えず、黙ったまま体を返し、水面をのぞいた。

奥が見えない茶色い水が、かえって壁に囲まれた小さな池をまるで底無しのように感じさせた。

「このオベリスクに秘密があるとすれば、地下だろうな」

「秘密ってなんですか？」

大石は体を起こして、あぐらをかいて深水のほうを向いた。

深水のほうは相変わらず寝たまま言う。

「何のためにこれが出てきたのかだ。……どうせこうしてても仕方ないし、調べるか」

深水はようやく起き上がって、上半身を大きく水面に乗り出した。その勢いでボートが揺れ、水面に同心円の波が立った。

大石は一応用心でボートの縁をつかんで揺れを抑えようとした。揺れは徐々に小さくなり、波はボートから離れて広がっていった。

最初の波が鏡にあたり、跳ね返ってくる。四方の壁からかえってきた波は、互いに干渉しあい、ボートの周りで不規則な波になった。何気なく波を目で追っていた大石は、波を個々に判別出来なくなり、波紋の異常さに気付いた。沸き立つように好き勝手な場所で凹凸を作る波は、いつまでも小さくならず、今は波のせいでボートが小さく揺れている。

「なんだこれ？」

深水はそう言っただけでボートの両縁をつかんだ。波はおさまるところかむしろ大きくなり、既に立ち上がれないほどボートは揺れている。大石も深水とは反対側の縁から濁った水面を注意深く観察した。

波と、掻き回されて舞った泥などの不純物で水面のすぐ下すら見えなくなっている。

突然の、嗚咽と水の跳ねる音に、大石は後を見た。深水が嘔吐していた。確かにひどく揺れているが、そんなに突然吐き気があると考えるにくい。だが、大石のほうも異常な吐き気に襲われていた。船酔いなどほとんどしたことがない。何かがおかしい。

深水が搾り出すように掠れ声で言った。

「音だ」

大石にもその言葉は聞こえたが、その意味を理解できるほどの余裕はなかった。

「低周波だ。音源は……下だ」

深水は顔だけボートから出し、虚ろな目で水面を見ている。

いつのまにかさざ波は失せ、大きなうねるような波がボートを上下に揺らしている。

二人の脳はもはや揺れも感じなくなり、吐き気と不快感で頭の中は満ちて理性や思考を失っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3957d/>

巨怪

2010年10月9日02時44分発行